
Birthday Present

テンチョ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B i r t h d a y P r e s e n t

【Nコード】

N 2 0 7 4 C

【作者名】

テンチヨ

【あらすじ】

普通の生活を送る主人公の稲本篤いなもとあつしに次々と起こる災難。やがて大きな事件に巻き込まれてしまう篤。事件の謎をとくためにひとりでたちむかうが…。

Scene 1 稲本 篤(いなもと あつし)というオトコ

『…っていうか、ホントにしょうがない親父だよねえ。まあ、でもうちの親父よりはマシなほうかな？うちの親父なんか実の子供の前で堂々と浮気してしまうような奴だったしね。なんて変なトークをしている間にお時間が来てしまいましたね。じゃあですね、最後のナンバーはこのクソ暑い、一足早く来てしまいました夏にですね、相応しい曲できましたー。それでは聞いてくださーい。新曲、SEXY…』

僕は携帯ラジオの電源をOFFにした。

「ふう〜、マジくそあちいな…」

服をパタパタしてあおぐ。

流れる汗を拭った。

いつもならこの時間なんて外にいることすら珍しい。

こども天気がいいと散歩もしてみたくなる。だから街をぶらついて

みたが…、やつぱり暑い。

やめときゃよかった。

確かこの辺にファミレスあったはず、そこで一服することにした。

全国チェーン展開の『アースラーク』の側まで来ていたので、休暇することにした。

ここは俺がガキの頃から営業しているが、昔から繁盛してるところをみたことが無い。

よく潰れないと思う。久しぶりに入った店内は相変わらずガラガラ。

俺が一番奥の席へすわると、ウェイトレスがやってきた。

「いらつしゃいませ、ご注文がお決まりでし…」

「アイステイーとサンド。」

ウエイトレスがしゃべり終わる前に間髪いれず注文。ウエイトレスは少しムツとしていたが繰り返した。

「アイステイーとサンドイッチですね？以上でよろしいですか？」

「…」

「…かしこまりました。」

皿にムツとした表情でウエイトレスは厨房に消えていった。

愛想無い店員だな、まあこんな暇ならあんな接客にもなるか。

なんて考えながら、しばらくぼーっとしてた。

これからどう暇つぶしするか考えながら。

ふと時間が気になり店内の時計を見ようとしたときだった。
こっちをじっと見ている女に気付いた。

Scene 2 再会？

どうもみたことがある。

その女はこつちが気付いたのを確認すると、微笑みながら俺のテールの真向かいに座った。

誰だっけ？なんとなく覚えている気がする。たしか…。

「キミ、稲本くん…でしょ？」

「えーっと…」

「アツちゃんでしょ？ボクの事、忘れた？覚えてない？」

喉まで出かかっている。

綺麗な金色の長い髪に、吸い込まれそうな綺麗な目。だけど、なんか俺の覚えてる子とはちょっと違う。

「そっかあ…。もう20年たつもんね。忘れちゃうか。しょうがない、一応連絡しないとね。」

彼女は携帯を取り出し電話をかけた。

…20年？俺がまだ小学生の頃か？

「もしもし。所長ですかあ？今駅裏のエデンです。ええ、アツちゃん見つけたんで…、え？だからあ……」
所長？

なんとなくだが思い出してきた。

「…ってことだから、早く来てね。ボクお金持って来るの忘れて、はいはいわかりました。だからお願い。うん、じゃあね。」

「あのさ？」

「ん？」

「キミ、もしかして…」

「お待たせいたしました。アイスティーとサンドイッチです。」

ウエイトレスがいつの間にかそばに来ていた。

おいおい、タイミングワリイよ。

何食わぬ顔でウエイトレスは続ける。

「ご注文は以上でよろしいでしょうか？」

彼女がこっちみて笑う。

「あ、すみませーん。あたしにも同じのお願いします。伝票はこの
ひとので。」

「は？」

「かしこまりました。」

おいおい。

彼女はこっちに手を合わせて笑う。

「…ごちー！」

「はあ？」

俺はとっさに返した。

「あのさ、ごちーじゃねーつつうのー！」

「電話聞いてなかった？ボク今、持ち合わせないんだ。だからアッ
ちゃんのおごりってことで、ね？」

なんじゃそりゃ？

「あのさ、なんで俺がおごんなきゃいけないのさ？」

「わかったよ、じゃあ…後でカラダで払うから…。おごって…。」

やばい、馴れ馴れしいが可愛い子にウルウルされると弱い。
いかん！ペースに騙されるな、俺。

「俺だつてそんな持ち合わせねーぞ？だから駄目だ。」

「しっかし今日は暑いねえ。いい天気だな。」

そうきたか。とぼけるか。

「そのサンドイッチ、美味しい？どれどれ。」

彼女は俺のサンドイッチに手をつけた。

「ん〜、んぐんぐ。あー、なんか普通の味。頼まなきゃよかったかな？」

「そつだな、みさと。」

「へ？」

彼女はキョトンとしてる。

「おまえ、みさとだろ？松葉みさと。小学生とき同じクラスだった。」

彼女はニコツと笑った。

「ちがうよ。」

「へ？」

今度は俺がキョトンとしてしまった。

「じゃあ、誰だよ？」

「誰でしょう？」

「はあ？」

「ボク、誰なんだろうね？」

「…おい。」

「何？」

「何？じゃね…」

「お待たせいたしました。アイスティーとサンドイッチです。」
またタイミングが悪い。

なんだこのウエイトレス。

まあ、いいや。帰ろう。

「すみません、勘定ここに置いていきます。釣りいらないんで。」

「え？アツちゃん帰るの？なんで？もう少ししようよ。」

「ごちそうさま、ここに置いとくから。」

俺はウエイトレスに話すと財布から千円をテーブルに置き、そのまま店を出た。

Scene 3 所長と助手

公園近くの温度計は30度を越えていた。もうすぐ夕方だというのに、この暑さは正直身体に答える。

若いときは平気だったのに。というかまだ27歳だが、こつも体力が少なくなるのを感じるとさすがに歳とったな、って苦笑いだ。とりあえず近くのベンチに腰をかけることにした。

まだ時間はあるし、何しようかなんて考えていた時だった。

「稲本くんですよね？」

俺の名前を呼ぶ男性。

このクソ暑いときに上から下まで黒いスーツを着こなしている。すらっとしたモデル体型の中年男性だ。

そして俺はこの男を知っている。

「えっと、松葉…所長でしたよね？小さい頃俺んちの隣に住んでた？」

男は微笑んだ。

「覚えていてくれたんですね。いやあ、お久しぶりです。お母さんはお元気ですか？」

この男は松葉 たかし。小さい時の記憶だが、確か小さな興信所の所長、つまり探偵みたいな仕事をしていたはずだ。

「母さんは、亡くなりました。中学んときに交通事故で。」

所長は驚き、そして顔を曇らせた。

「そうでしたか…、いろいろ大変でしたでしょう？」

「まあ…。でも今の生活にももう慣れたので…」

「だーれだっ!？」

急に視界を遮られた。

冷たい手の感触。

聞き覚えのある声。

「…松葉みさと。」

「ぶーっ。はずれ。」

俺の視界を遮る手を振り払った。

「痛い。そんな乱暴にしなくてもいいじゃん。もう!」

彼女は口を尖らせる。

所長が笑いながら彼女に話かけた。

「里見くん、キミはいつでもどんな相手にもキミのペースでいこうとする。でもそれは時としてキミを不幸にすることでもあるし、キミのいい所でもある。でも、ケースバイケースで対応できないといい探偵になれないよ?」

「別にボク探偵になりたいわけじゃないよ!ブツブツ…」

所長は笑う。

「いや、稲本くん。すまなかつたね。」

「あ…、いえ。」

「じゃ、あらためて自己紹介しようか。こついうものです。」

所長から名刺を受け取った。

「あの…。」

「なんでしよう？稲本くん？」

「あ。篤でいいですよ。あの、さっき里見って言ってましたよね？
みさとじゃないんですか？」

所長は困ったように笑う。

「あー。えつとですね、私引越してから離婚しましてね…。」

みさとが割り込む。

「だからボク、里見が苗字なんだ。ママに引き取られたから。今は
所長の所でバイト中。まあ、助手ね。」

所長は苦笑いしている。

それか。松葉じゃないから違うと言い張ってたわけね。
いい歳して…、ガキみたいだ。

「それより所長お？いい加減、里見くんって呼ぶのやめてくれない
？みさと、でいいじゃない。」

「ならキミも所長と呼ばずにパパと呼んでください。」

「ヤダ、絶対にやだ。」

「じゃあ私も嫌です。」

この親にしてこの娘ありと思った。

それにしてもみさとがこんなにイイ女になってたなんてね。時間の魔法にかけられたみたいなきがした。

小さい頃はよく二人で遊んだっけ。

ままごとの時なんか、よくみさとにお嫁にもらってくださって言われたっけ。

小さい頃の楽しかった思い出だ。

思い出にふけっていると所長が切り出した。

「あ、そうそう。篤くん、まあ…そんなことはないと思うけどね、もし近いうちにキミの周りで変な事が起きたらでいい。連絡してくれないか？連絡先は名刺に書いてるし、キミも一人暮らしだからね、一応なんかあった時のためにもね。」

いささか疑問な所はあったが一応聞いた。

「わかりましたけど、なんかあったんですか？」

所長は笑いながら答えた。

「今手掛ける案件が素行調査だね。キミの家のそばのひとなんだよ。まあ調査対象がいわくつきの奴だね。万が一のことを考えて、だよ。」

「そうですか。じゃ、気をつけますね。失礼します。」

俺はふたりに会釈して公園をあとにした。

みさとはずっと手を振っていた。

Scene 4 カウントダウンの始まり

銭湯へよってからアパートへ帰宅。

汗ばんだ体が気持ち悪かったのですっきりした。

ニュース番組を見ながら飲む風呂上がりのビール。
冷たくて格別にうまかった。

ニュース番組の後は恋愛バラエティー。
それをぼーっと見てたせいかわからないが、今日再会したみさとの
ことを思い出していた。

好きなんだろうか？

まあいいや。明日仕事だしもう寝るとしよう。

その時だった。

ガタガタっ！…ドサツ…。

何かが外の階段を落ちていく感じの音がした。

このボロアパートには俺以外の住人がいるところはみたことがない。
ま、どこかの猫が足を踏み外したんだなと思う。
気にせずに休むことにした。

コンコン、コンコン。

ドアの方からノックしたような音がした。
こんな時間に誰だろう？

「はい…？」

ドアの向こうには誰もいない。風か。いいや。寝よう。
ドアを閉めようとしたとき今度は階段のほうから小さな物音がした。
いい加減にしろといつもならずドアを閉めて寝ただろう。
しかし、なぜか俺の脚は階段へ向かっていた。

そんな俺を後悔するのには時間がかからなかった。
運命の階段を俺は降りてしまったのだから。
階段を降りた俺は、目の前の光景を疑った。
見知らぬ男がひとり仰向けに倒れている。
思わず話かけた。

「大丈夫ですか？…ねえ、ちょっと！大丈夫ですか？」
傍目にみてもびくりともしない男。何もしてない俺。状況がのみに
めず混乱する。
落ち着け、俺。
まず救急車だ。早く呼ばないと！

抱き抱えたびくりともしない男性の体をいったん地面に下ろした。
携帯を取りに部屋に戻ろうとした時、なにかに躓いた。

「なんだ、これ？」

棒みたいな物？いや、角材か？思わず手にとってしまった。
いや、そんなことより救急車だ！

その時だった。

「きゃああああっ！何してるの！？あなたっ！」

静かな近所に女性の声が響いた。

管理人だ。懐中電灯で俺を照らしている。

「あ。管理人さん！大変なんです！救急車を……」

「け、警察、警察よばなきゃあああ！ひ、人殺しいいいいい！」

「管理人さん！ちよつと……！」

管理人は取り乱したまま自分の部屋まで駆け込んだ。

なんなんだよ……え！？

あまりに突発的なことが続いた。だから今自分のおかれている状況をなんとか理解できたのは、管理人の置き忘れた懐中電灯で照らされた窓越しの自分を見たときだった。

月明かりも手伝って見えた窓越しの自分は全身のいたるところが黒く写る。

なんだろうと思いき直接みると、赤色まみれの両手に紅く染まったTシャツ。

そして離さず握っていたのは赤黒くたたずんだ色にそまつた角材。誰が見てもここにいる俺は、どこにでもいる普通のひとには見えなかった。

状況をだんだん理解し、気が動転しそうになる。

管理人が呼んだであろうパトカーのサイレンの音が遠くから聞こえてくるのが解る。

やばい、とりあえずこの場は離れないと！

慌てて部屋に戻り財布、免許証そして携帯電話と松葉所長に貰った名刺。

必要最低限のものを持ち出して一目散にアパートをあとにした。

今思えばこの時すでにカウントダウンは始まっていたんだ。

そして、管理人がこの時人生を終えていたことも知らず、お世話になりましたと心で謝りながら、ただ遠くへ逃げようと走り続けた。

Scene 5 事件明朝

「…というわけで昨晚起きたこの殺人事件なんですが、何らかの事情を知っていると思われまますこのアパートの住人が昨夜から行方不明となっています。近所の人の話では、このアパートには人が住んでいるような感じはなかったということで、被害者は身元がまだ不明の男性とこのアパートの管理人という今回のこの事件、不思議なことにとどの部屋にも表札がなく、住人の情報書類なども管理人室からは見つかりませんでした。警察は依然捜査中とのことです。とりあえず現場からは以上…」

「嘘…？アツちゃんのアパートじゃない！大変、コーヒー入れてる場合じゃないよ！ちよつと、所長お！起きてくださいよー。」

私は慌てて二階の所長室まで駆け込む。

所長はソファで熟睡していた。

「所長！おきて！テレビ！ニュース、ニュース見て！」

「ちよつと…。なにかね、里見くん。朝からうるさくしないでよお。昨日徹夜だったんだからさ…」

「いいから一階にきてテレビ見てください！早く！」

私は寝ぼけてる社長の手をひき、一階キッチンルームへ下りる。

「ほら、見て！アツちゃんのアパートで殺人事件なの！」

所長が目を丸くした。

「なんだったって!？」

所長はテレビを食い入るように見ている。

事務所の電話が鳴った。

「もしもし、松葉興信所ですが、あー！」

所長はまだテレビにくぎづけだ。

「…というわけで、まあ世の中じゃ殺人事件も毎日起きていますね。気をつけたいものです。続きまして、スクープ！ついにあの大物スターが破局です。」

「篤くん、大丈夫か…？」

所長がテレビに夢中になっていた。

私がとつた電話の相手はアツちゃんだった。

「…アツちゃん！大丈夫？今どこにいるの！」

「みさと、松葉さんに代わってもらえるか？」

「うん、所長！アツちゃんから電話ですう！所長に代わってっ！」

私は所長に受話器を渡した。

「もしもし？篤くんですか？」

みさとから所長に電話が代わった。繋がった。よかった。

とつさだったが、名刺を携帯の側に置いていたので忘れずにすんだ。

「はい。松葉さん、…なにがなんだかまだ解らないですよ。なんでこんな目にあわなきゃいけないのか…！」

「とりあえず無事だったようだね、よかった。テレビじゃニュース

で結構大騒ぎしてるよ。とりあえず今、何処にいるんだい？」

そういえば無我夢中で走ってそのまま眠るように寝たんだけ。ここは確か…、内斉川だ。なんどか遠出の散歩で来たことがある。

「内斉川です。橋の下にいます。」

「内斉川か、わかった。里見くんを迎えに行かせよう。」

携帯のアラーム音なる。まずい、バッテリーがない。

「あ、松葉さん。携帯もうバッテリーやばいんで。あと、できれば着替え欲しいんですけど。慌てて出て来たので。」

「わかった。篤くんはなるべく人目に付かないように気をつけてね。」

「はい。あの。」

疑問があつた。

「なんだね？」

「テレビで騒いでたつてことは、事件なんですか？」

「篤くん、キミ、現場にいたのに何も知らないのかい？連続殺…」

「え？もしもし！」

携帯の充電がなくなってしまった。

所長の最後の言葉、連続殺人のことか？

殺人？あの男のひと死んだのか？

事故じゃないのはなんとなくわかった。

気になるのは連続ということ。

誰が殺された？

何が起きた？

なんで、こんなことになった？

落ち着け。

とりあえず、みさとが来てくれるまで少しやすもう。

Scene 6 事情確認

みさとが着替えを持ってきた。

「なんだよ、じっと見てんじゃねーよ。」

みさとはニンマリ笑う。

「いいジャン別に。減るもんじゃないでしょ。女のこみたいな事言わないでよ、気持ちワルイ。」

また始まった。

「あのなあ、みさとがもし俺にじーっと着替えみられたら嫌だろ？」

みさとはさらにニヤニヤする。

「へ〜。アツちゃんわ〜、ボクのからだ〜、みたいんだあ…。」

「ちが…!」

「えっち。」

みさとは顔を赤くした。

「だから、自分がされて嫌な事はひとにするなってこと!小さい頃いわれたろ!」

「別にいいよ?アツちゃんになら、ボクの体みられても。」

明らかに俺をからかっているのがわかる。ちょっとムカついた。俺もまだ青いな。

みさとが着替え終わった俺のシャツをたたんでくれた。

「あらら。しかしまあ派手に紅く染まっちゃったね、このTシャツ。これじゃあ殺人鬼に間違われてもしょうがないよ。」

「みさと、人事だと思ってるだろ？」

「だって人事じゃない？」

ああいえばこう言う。

昔は人懐っこくて可愛いやつだったのに。

「あーあ、なんで俺こんな目にあわなきゃいけないのかね。」

みさとが真面目な顔で俺を見る。

「だったらさ、逃げないで堂々と駆け付けた警察のひとに事情を説明したらよかったじゃん。逃げ出したアツちゃんが悪いと思うよ。逃げたらそりゃ、疑われちゃうって。」

返す言葉もない。

その通りだ。

反省しなきゃいけないが、それよりも確認しなきゃいけない事があった。

「なあ、みさと。」

「なーに？」

「あのさ、松葉さんに電話した時にさ切れちゃう直前にさ、連続殺人があつたって聞こえたんだけどさ。」

「…うん。」

みさとの顔が曇る。

「あのね、身元不明の男性が最初に遺体で発見されたんだって。」

「…もうひとりには？」

「アパートの管理人さんだって…、ねえ？アツちゃんホントに知らなかったの？」

「ああ。俺、管理人さんに見つかったあとパニックになっちゃってさ。慌てて警察呼ばれたと思って気が動転してさ。とりあえず逃げ出したんだ。まさか、管理人さんが殺されたなんて。」

「そつだ。俺が逃げ出してから警察がくるまでそんなに時間は無かったはずだ。」

「なにか、ひっかかる。「アツちゃん、とりあえずいつまでもここにいても拉致あかないよ？」」

「それもそつだ。」

「とにかくゆっくり落ち着いて状況を整理したい。」

「そつだな。あーあ、転勤してきたばかりなのにな。仕事休まないとマズイよな。」

「そだね。大事はとるべきだよ。何が起きるか解らないから、ね！」

みさとがニコツと笑ってくれた。

「ねえ？アツちゃん。どつかでご飯食べてかない？ボクさあ朝からバタバタしてたからさ、あまり食べてないんだ。」

「そついえば俺も飯食べてなかったな。」

確かに腹へった。

「よし、じゃあアースラークでいいか？」

「うん。いいいい」

俺達はちよつとおそめの朝食をとり、街中へと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2074c/>

Birthday Present

2010年10月10日03時53分発行